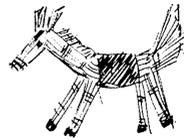


火

渡部葉子



その暖かさ

薪ストーブは良かったな。その暖かさが柔らかくて、何となく香ばしくて、チロチロと動く赤い炎がかいま見えるのも実に心楽しい。子どもたちに絵本を読んだり、紙芝居を見せたり、なぞなぞ遊びをしたのも、みんなストーブの回りだった。

雪遊びでぐっしょりぬれた手袋や靴下、ズボンまで回りのわくにかげ、一生懸命ストーブを燃すと、まもなく衣類からホヤホヤと湯気が立ち昇り、

「ハイ○○さん乾いたわよ」

と手袋を渡すと、子どもたちはまたそれをはめて外に飛び出す。まるでぬらすのと乾かすのと追いかけてこみたいだった。

職員会議も、ストーブの回りでひぎの上にノートを置いて。来客も、父母との懇談も、教材の準備も、すべてストーブの火加減を見ながらだった。

今は温風暖房で、スイッチをボンと押すとふんわり春風が頬をなでる。便利で清潔で危険度も少なく誠に快適なのだけれど、時々味気なく物足らなく感ずるのはなぜだろう。

たしかにいろいろと手数はかかるけれど、薪ストーブには心をこめてたくという楽しみがあったし、「火」を扱っているという緊張感があったように思う。

そのすさまじさ

それは昼火事だった。五百メートルほど離れた県庁舎が燃えている。けたたましい消防車のサイレンと、水の流れのよう一方に集中していく人の波を見て、これは大変なことになるなと思った。

不意の出来事にこわばった表情の子どもたち。すがりつきたいであろうその心を思い、わたしは自分の手が四十本ないことを本当に悲しんだ。

次々と迎えにくる家族に、ひとりずつチェックして手渡

し、最後に残った男児の家がすぐ近くだったので送って行ったら、家の人は留守で錠がしまっていた。

「ママがいない!!」

ヘタヘタと腰がぬけたようになったその子は、涙と鼻の顔をこすりつけるようにしてしがみついていた。その子をしっかりと抱きかかえながら、幼い生命を預かる仕事の責任の重さに、背筋がキューッととなり手足がしびれるような感覚を味わった。

後であの大きな庁舎が一瞬にして火炎に包まれたという話を聞き、ぼう然となると共にふと、地震・雷・火事・おやじというけれど、この四つ共に縁がなく外地で育ったわたしは、火事の恐ろしさが本当には分かっているのだと思ひ、直接その恐ろしさを知ろうと焼跡に向かって歩いた。教師になりたての、まだ若いおねえさん先生の頃のことである。

そのなつかしさ

昨冬、東部アメリカのあるお宅を訪問した時、快適に家のすみずみまで暖められたスチームのある部屋、緑のきれいな観葉植物は姿よく適所におさまり、熱いお茶とお手製のケー

キ、心暖まる会話の中で、もうひとつわたしの心を打ったのは、暖炉に組まれた二、三本の丸太が、トロトロと細い炎をあげて、さりげなく静かに燃えていたことである。もちろんそれは採暖としての用はなさず、アクセサリ的存在にすぎないと思つた。

しかしその暖炉は物語っていた。

「よくいらつしゃいました」

「この寒い時に遠く日本から本当によく」

「わたしはあなたにお会いできてうれしい」

「あの時のまま、お変わりないですね」

「どうぞ暖まって。ゆっくりくつろいで」

その夜の主人側の、客をもてなす暖かい心くばりのすべてをひとつにまとめて、柔らかい炎は、右に左に、赤く青く、黄色くまた白く、様々な変化を見せながらゆらめき、わたしたちはその真心を十二分にくみ取ることができ、心からくつろいだものだった。暖炉は人の和の中心であり、最高のご馳走のひとつであったのだ。

わたしはあの炎の色と、木の燃える香ばしい薫りが、今も目に心にやきついて忘れられない。

(秋田大学)